

#### 14. 「花煞」附録 結婚と死 順風

豈明先生：

『語絲』六八期で花煞のことが語られているのを読み、わたしの知っているところを申し上げようと準備しました。こういう伝説はかつて人がなんども語るのを聞いて、それにはなかなか来歴があることを知りました。ただ残念ながらわたしが聞いたのも断片にすぎず、不完全です。以前花嫁がハサミで駕籠の中で自殺したことがあって、それが花煞の来源だということです。したがって紹興では結婚の時に鉄を見るのを忌み、凡そ門扉の鉄環、壁の鉄釘の類は、皆赤い紙で覆ってしまいます。

その女性が駕籠の中で自殺した事については、『花煞卷』の中に述べてあるそうです。紹興では夏の晩によく“宣卷”〔宝巻語り〕があり、『花煞卷』はそうした長篇の宝巻の一つですが、わたしは聞いたことがありません。ただある友人がこの刊本を見たのですが、もうはつきり覚えていません。ただその花嫁は攫われて結婚したので、自殺したのだということだけは覚えていません。

紹興で以前流行した花嫁衣装は、わたしはあるいはこうした伝説と関係がないわけではないと思います。その中で最も注意すべきは、花嫁が駕籠を出る時にかぶる紙製の“花冠”です。その冠は竹ひごで骨格を作り、外側は紅緑の色紙および金紙を糊付けして作り、上に二寸ほどの泥人形を差し、名付けて“花冠菩薩”と言います。一般の状況から言いますと、本来生きている人間は紙の帽子をかぶることはできません。例えば夏にもつばら鬼に見せるために演じられる“大戯”（Doohsii）と“目蓮”は、舞台の横に多くの紙の帽子がかけてあります。劇中の人物は皆普通の格好をしていますが、ただ舞台に出てきた鬼王に活無常（Wueh-wuzoang）だけは、要するに鬼怪の類に属するものだけがそこにかけてある紙の帽子を被ります。（舞台を退く時はやはり脱いで舞台のそばにかけておき、かぶったまま楽屋には入らず、上演が終われば紙銭と一緒に燃やします。）いま花嫁も紙の帽子を被るのは、花煞神の類に扮するのではないのでしょうか。又着ている“紅緑の大袖”も普通の人が着る衣服のようではありません。形状はとても“女吊神”がチョッキの下に着る赤いシャツに似ています。又ある友人の話では、紹興のあるところでは、花嫁はそういう貸し出しの“紅緑の大袖”を着ないで、別の人から借りた“寿衣”〔経帷子〕を着る人があるそうです。これはどういう理由なのか分かりません。思いますに、実地に調べてみさえすれば、恐らくその道理が見つかるでしょう。老人の記憶にもあるいは有用な材料が得られるかもしれません。

駕籠探しは確かに他の妖怪を探しているようで、花煞神を探しているわけではありません。花駕籠の中にはまだいろんな別の鬼怪が隠れていて、花嫁の害になるに十分です。例えば『欧陽方の縁組』という芝居の中で、花駕籠の天辺に首吊りの死霊が隠れていて、後で日月眼を持った鄭三弟に見つけられるというのは、即ちその一例です。

まだあります。紹興の多くの家では結婚の時にいままで“礼生”〔司会役〕に新婚を唱えてもらいましたが、別のある家々では道士を一人呼んで唱えてもらいます。かつて一度見たことがあ

るのですが、唱えるのはおめでたい言葉にすぎませんが、とても意味のある事のようにです。道士がふだんやる手管は、お札を出したり、神へ上奏したり、法術をやるなど、いずれも原始民族の魔法使いの挙動です。結婚の時に道士を招いて祈ってもらうのは、魔術の意味がそこに含まれているはずで、唱えるのはすでにめでたい言葉に変わっていて呪文ではありませんけれども。中国は極めて古い国柄で、原始時代の痕跡を今でもまだ保存していますから、注意して調査研究しさえすれば、きっと多くの極めて価値ある資料が得られるでしょう。事柄がまた遠く外れました。ここで“止まれ”にしましょう。順風、三月九日上海にて。

豈明案ずるに、花嫁の装束は、あるいは死人に扮しているのかもしれないが、その意図は邪を以って邪を避けるにあり、方相氏が鬼面を被っているようなものだ。しかしその中でもっと面白いのは、結婚と死との問題である。ギリシアの古今宗教風俗の比較研究の本の中で同様のことに言及されているのを思い出した。ギリシアの花嫁の服色および沐浴塗膏などの儀式はみな死人の時と同じなのである。紹興の新婚さんの衣服はみな香で薫きしめるが、使うのは芸香で、経帷子を薫きしめるには柏香を使う。彼らも“溥浴”の典礼を行うが、これは決してわれわれが考える風呂に入るような簡単なものではなく、実は納棺の時と同じように重要な儀式である。ギリシアの考えを我々は理解することができる。彼らの地母崇拜については昔に一種の宗教儀式があって、ほぼ原始民族の間で通行する冠礼（Initiation）のようなもので、ギリシアではこれを成就（Telos）と言い、その趣旨は人天交通の密儀を宣言することにある。人が死ねば天上に生まれ、諸神と結合する。そして男女の配偶によってその象徴とするのである。人間世界の結婚はそれによって具体的に成就の喜びを顕示するだけでなく、亦将来の大成就（死）という永生の試みでもある。だから結婚は常に成就と称され、新婚さんは成就者（Teleioi）と呼ばれるのである。ギリシアの風俗が結婚の服飾儀式を死者に転用したわけは、人に死の悲しみをあまり感じさせないようにと、かつそれによって未来への希望を助長しようとしたことである。『陀螺』の中にわたしはかつて三首の現代ギリシアの挽歌を訳したが、その間の一つの中心思想を指摘すれば、死と結婚を一緒にして、この世の死はつまりあの世の結婚だと考えたのである。今一首を次に転録する。

“息子よ、お前はなぜ行こうとするのか、幽冥の中へ。そこでは雄鶏は鳴かないし、雌鶏も鳴かない、そこには泉もないし、野原に青い草もない。

餓えたならば？ そこには食べるものがない。

渴いたならば？ そこには飲むものがない。

横になって休もうとしたなら？ 安眠を得られない。

ならば留まれ、息子よ。

お前の家に、おまえ自身の家族のなかに留まれ。”

“いや、わたしは留まらない、わたしの親愛なる父と深愛なる母よ。

昨日はわたしの良き日であった、昨晚はわたしの結婚であった。

幽冥がわたしを夫にし、墳墓がわたしの新しい母となった。”

紹興の風俗がどういう意味なのかわたしはまだ理解できないでいる。わたしの見るところでは、それはギリシアのように花嫁の花の冠を死人の頭に載せるのとは違って、たぶん逆に生きた人間から死装束を学んだのだろう。中国人の心では結婚は一“大事”だと思われる、これは当然あることだ、しかし必ずしも死と関係するという深刻な心理が生まれるとは限らない。独断的に言えば、おそらく一種の辟邪という魔術の作用に他ならないだろう。こうした事には専門の料理人を呼んで来なければならず、われわれ店を拓げただけの道士では実際いささか力が及ばない。それに、花嫁が拝堂〔花嫁の夫の父母へのお目見え〕する時に手にする長柄のうちわは、何の用にするのかわからない、——こうした縁起や伝説は三埭街の老嫗〔結婚した墮民の女〕に訊かねばならないのだろう、附会や訛伝は免れないけれども、それでもわずかな手がかりが得られるかもしれない。三月十六日。

※初出：1926年4月19日『語絲』第75期